陽気は幸せの種

陽気だより

図書出版　養　徳　社
〒632-0016
天理市川原城町388
TEL　0743（62）4503
FAX　0743（63）8077

養徳社　検索
ホームページからご覧いただけます

No.65　2012.8.15

第7号（24年12月号）から

『陽気』は、昭和24年4月の創刊、今年で63年を迎えます。過去の記事から、その歩みの一端を振り返っていきます。

近日息子　桂春團治

お求めによりまして、おなじみの大阪落語を一席申し上げます。

親父　コレお前、さっきからそこで何をしているね？

息子　今、膳棚（ぜんだな）の掃除をしてましたら、庭へ胡麻をひっくりかえしまして、手ですくをと思いましたけど、砂がはいったらきたないと思うて、やいと箸で一粒づゝひろてます。

親父　そんなもの、一粒づゝひろうていて今日中にひろえるか？

息子　それは無理です。せめて今月中からしてもらわんと。

親父　バカ。そんなことを云うているから、近所の人が皆お前を馬鹿というのぢゃ。近所の人が云うのではない。私に云わしてもお前は馬鹿ぢゃ。その馬鹿のわけを聞かしてやろうか。十日ほど前のことやった。一度芝居が見たい、どこでもよい、初日が開いたら知らしておくれというたら、ハイと返事をしたかと思うと表に出て、すぐ帰ってくるなり、お父さん、明日が初日です、というから私も慌ててその翌日、弁当をつくって道頓堀へ行った、角、中、浪速座、みな休み。帰ってそのことを云うたら、ヘイ、昨日行ったら、中座の表に、近日より、と書いてありました。で、近日ならマア明日、と云いました。……あほらして、開いた口がふさがらんわ。お前らは、なんにも知らんが、芝居なんかはナ、看板おろしたら、いつやるか知れずとも表には近日より、と書いてお客様の気をひくものや。昔から、人がノミというたらツチというたが、今ではアカン、ノミというたら道具箱でも持ってくるようにせねばアカンのぢゃ。

息子　そんならこれからサキグリの方にかからしてもらいますわ。

父親　バカ。人がこう云うとあゝ云うて、さからいくさる。――コレ、さっきに女の人が何をしにきていたのや。ナニ？紙を売りにきた？　買うたか？　それはよかった。その紙、二三枚下さい。便所に行くから。

息子　ヘイ、どうぞお入り。ただ今すいてます。

親父　何を云うてますねン。お前と私との二人の家ぢゃ、そこにだれが入ります。

息子　それは知れてますが、だれかが入っていないかと、お父さんに心配ささずに安心させてますのや。これがサキグリです。サァお入り。戸を開けましょうか、草履そろえましょう、お尻まくりましょうか、水かけましょか。

親父　バカ。便所に入らぬ先にお尻まくって水かけられてたまるかいナ。なんぢゃ昨日から腹の具合が悪うて困ってるのぢゃがナ。

息子　エエ、お腹を具合悪るおますか？ソラいかんわ。

親父　コレコレ、どこへ行くのぢゃ。しばらくすると、息子、汗ダクダクかいて帰ってきて、

息子　ただ今。

（これから、あわて者の息子が医者を呼ぶ、棺おけを注文するというヒト騒動が起こります……略）

祟りの石碑

埼玉県浦和市の東南約一里離れた小谷場に、昔から「殿山」と呼ばれている村がある。三百年程昔の出来事であるが、そこは或る殿様の妾の屋敷であって、伝えられるところによれば、その妾がある時殿様の怒りにふれて、手打ちになってその美しい若い女の死体はそのまま沼の中へ投げ込まれた。しかし誰一人殿様の怒りを怖れて弔う者とてなかった。

悲しみと恨みを抱いて死んでいった女の霊は、この屋敷に次から次へと怪奇な物語りや恐ろしい出来事を生んで、屋敷はやがて住む人も絶えて雨露の荒れるにまかせ、いつしか跡形もなくなった。が、怪奇は永遠に絶えないので、村の人達の心尽しによって、不運な彼女を慰めるために石碑が立てられた。けれど執念の深い女の恨みはそれでもなお絶えないで、その石碑に一寸ふれただけでも、ふれた者の身体には恐ろしい祟りが必ずあった。四十軒ほどの村の家々には、仏壇の外に、必ずその石碑の主を供養するため戒名が刻まれて、供物を毎日供えて恐れていたのである。

荒井武一氏が浦和の町で布教に従事していた頃のことである。もと大宝町で小学校の校長をしていた人の未亡人で、高野きいという婦人が、年の暮れも押し詰った二十二日の日に尋ねて来た。

「六ツになる日出雄という子供ですが、ひどい熱病で、どうしても薬では助かりません。いろ〳〵と祈祷もして見ますが、矢張り駄目でございます。何とかお助け頂きたいのですが」

詳しく訊ねてみると、以上のような伝説を語って、その日出雄という子供は、十日ほど前のこと、その石碑の近くで遊んでいて過ってその石碑にふれて倒してしまった。それから忽ち名の知れない病のために四十度の熱が出てどうしても下らないという話であった。

聞いていた信者の二三の人は、この話だけでもう顔色が変っていた。氏は、

「明日はキット行ってその祟りを封じてやる」

と言って、翌日案内されて出掛けて行った。なるほど話よりも見ただけでも恐しくなる、怪奇な神秘を湛えた沼と昼なお暗い森、その中を歩いてゆくと横一尺縦二尺位の苔むした石碑。それは花や赤飯など沢山の供物が供えられて、線香の煙がゆらいでいた。

碑の前に立った氏はもとより祟りを封ずる術を知らなかった。が瞬間、氏の頭に浮んだのはたゞ、病める子と親をして教祖の道を通って貰わうということであった。

「身も心も救け一条の上に捧げることによって、神はどんな守護もする……何が祟りだ」

と思った時には、思わず左の足が掛って、石碑を蹴倒してしまった。

余りのことに恐れ戦く人々を残して山を下り、子供の家を訪れ、母親に心定めの話をした。四時間ほどして帰る頃には、母親の顔には安心と喜びが浮び、子供の熱はいつしかなくなって床を離れるようになった。

それ以来、三百年来、人々の恐れていた石碑は祟りもなくなり、母親は今では教会長の妻として熱心におみちのために働いている。

みちのとも　昭和七年十月三日（「真実の道」道友社刊より）

早くも重版！

人間がたすかる原理

—「天の理」を解きほぐす—

中臺 勘治 著
（報徳分教会長）

四六判並製 304 頁
定価＝1,365 円（税込）

図書出版 養徳社
天理市川原城町 388
☎(0743)62-4503
http://yotokusha.com/

養徳社 よもやま話

○……先日、所属教会からこどもおぢばがえりに引率の一人として一日だけ参加した。朝の九時には気温三十度を超えていた。会場に行く度に冷たいお茶をいただき、生きる喜びを味わわせていただいた。今年は年齢のせいか、子どもたちと一緒に会場には入らずテントの下で待っていた。引率というより子どもに付いていくのが精一杯でした。何をしに行ったのか？　引率の先生方ごめんなさい。

○……おやさとパレードの花火をカメラに収めるべく意気揚々と出発しようとした矢先、バケツをひっくり返したような夕立に見舞われた。夕づとめまでには止んだものの、パレード直前に再び降り始めカメラも服もしっとり。雨の中撮れたのが左の写真です……。